日本聖公会　川越基督教会

資料委員会　便り

ARCHIVES NEWS

第11号
2024年
9月01日
発行

新たな資料「初雁幼稚園関係」が見つかった

初雁幼稚園名誉園長　ルカ　野澤達也

今年３月に刊行された「希望あふれる子どもの園…初雁幼稚園 120 年のあゆみ」は初雁幼稚園の創立から現在までの120年のあゆみを振り返りまとめた記念誌であるが、第６章、第７章には松平惟太郎園長の時代が取り上げられている。1950 年から 1977 年にわたり園長を務められている。在任期間が長期ではあったが、その間の記述はあまり多くない。そう考えた読者もおられるだろう。じつはその時代の資料が少なかった、という理由だ。

記念誌執筆にあたって使われた大部分の資料は、初雁幼稚園に残されていた一連の資料群である。その中には松平園長の時代の資料が少なかった。３か月ほど前、教会の歴史資料委員会を訪れた際、会館の３階（屋根裏の資料庫）に松平司祭が逝去されたのちに託された資料は保管されているが、そのうちの１箱「初雁幼稚園関係」がそのまま手つかずに残っていると聞いた。梯子を上ってその資料箱を開いて驚いた。まさに空白部分を埋めるような資料が詰まっていたのだ。

当時を想像すると、牧師としての仕事と園長としての仕事は全て牧師館の茶の間で書かれていたのではないか。園の行事などには幼稚園の現場に行かなくてはならないが、事務的な仕事の大半が牧師館の茶の間（書斎）で書かれていたのであろう。その中で幼稚園関係は専用の箱に分けられ

ていたと思う。園長退任後にはもちろん後任の森紀旦園長に引き継がれているが、一箱のみ郭町のご自宅に他の資料と共に保管されていたのだと思う。

その資料の中のひとつを取り上げる。1965（昭和 40）年には園舎の改築という大事業を行っている。明治時代から使われていた園舎の老朽化と園児増による過密状態である。この事業については記念誌でもかなり詳しくふれている。ここで新たに見つかった資料としては建築工事請負契約書、見積書。改築会計、献金・寄付者を記録したノー

ト3冊、当日の記念感謝式の式文（謄写版手書き）等などである。また、松平園長が当日の挨拶の原稿と思われる資料もあった。

1965年11月7日に行われた記念式の様子は記念誌の102ページに掲載されているが、司式は大久保直彦主教と松平惟太郎司祭、何人かの若者が聖歌隊として歌っている。私もおそらく参加していたのであろうが、記憶にはない。前出の献金者名簿の中の1冊は教会関係者の名前が多数あるが、当時のシニアー、ジュニアー、高校生の懐かしいお名前が書かれている。

園舎建築には多額の資金が必要で、多くの方からの募金・献金のほか、何年かにわたって積み立てていた自己資金もあった。最終的に足りない120万円は当時の埼玉銀行から借入をしている。その時の約束手形も出てきた。借主は宗教法人の川越基督教会であるが、連帯保証人として、松平惟太郎、山本英二、松村恒夫の署名捺印もあった。返済は翌月から毎月支払い、1年後には完済している。

70年前のこと

1951年卒園生　松平謙次

筆者は2列目、右から3番目

埼玉県でもっとも古い歴史を持つ初雁幼稚園は2021年に創立120年を迎え、それを機に120周年の記念誌が作成・発行されました。著者は野澤達也名誉園長。その在任期間は1982年から2012年までの30年間、実に幼稚園120年の歴史の4分の1を占めます。まさに園の歴史を記すにうってつけの人でした。執筆に際しては、膨大な記録・資料・史料の収集と整理などに実に3年の月月を費やしたということですが、この多大なご苦労と誠実な仕事ぶりに心から敬意と称賛の意を表します。

本を手に取ってみると、まず20章に及ぶ目次が目に入ります。そこから120年という歴史の重みと多様性、数々の苦難・試練の様子を窺い知ることが出来ます。本文は平易で分かりやすく、子どもたち、保護者、教職員の皆さんの姿、その時々の時代背景が生き生きと描かれています。野澤園長は2004年に60歳定年を迎えますが、在職継続を求める多くの声に応え2012年まで勤め、山本由香里さんにバトンタッチします。その後園は認定こども園に転換し、こんにちに至ります。120年の間には時代の荒波にもまれて転覆しそうになった時代もあったでしょう。しかし一貫して変わらなかったのは「キリスト教主義に基づいて一人ひとりの魂に愛情と尊敬を以て接する」(p.103)という姿勢でした。また目に見える形として送迎バスは使わない、制服は作らない(バッチは今でも使われていますか？)方針も一貫して変わりません。

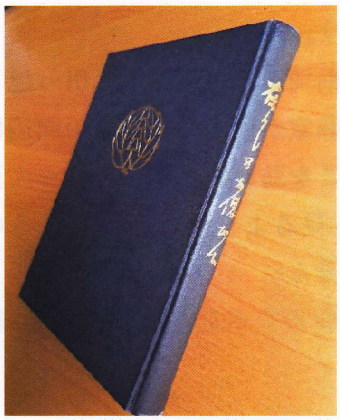
私は1951年の卒園生ですが、一つ付け加えたいことがあります。この本の各章の最後にはそれぞれの時代の教職員の氏名が記されています。自分がお世話になった時代の先生方のお顔は70年以上たった今も思い出すことが出来ます。その中のお一人に藤

井京子先生がいます。その当時、連馨寺横の路地にあった「寿」とうお蕎麦屋さんのお嬢さん(長女)でした。私の古いアルバムには京子さんの写真と、京子さんも写っている卒園記念写真が残っています。京子さんはそれから何十年もたって札の辻で「エプロン亭」というレストランを開きました。昨年秋、用事があって川越に行った折、やっとエプロン亭に入る機会がありました。お店は息子さんの代に移っていましたが、自分の名前と昔お母様に幼稚園でお世話になったと言うと、何と「母は元気で奥にいます、今呼びます」と言って京子さんを呼んでくれたのです。そして京子さんは「謙次さんでしょう？覚えていますよ。活発なお子さんでした」と言ってくれました。健在であったことにも驚きました（90歳以上）が、私の名前まで憶えていてくれたことに感激しました。短い会話を交わした後、辞去しましたが70年も前のこと、世話をした子どものことを覚えていてくれたことに、しばらく胸が熱くなっていました。

（現　東京教区　インマヌエル新生教会信徒）

「在りし日を偲びて」より　川越時代の大内磯子さん

森　信幸



大内磯子（いそこ）さんの経歴等については「資料委員会便り第5号」でドゥエル・ベーリ先生によって書かれていますのでそちらの方もご覧ください。

ここでは、磯子さんが1935年（昭和10年）に51歳の若さで亡くられた時に、ご主人の佐藤権太郎氏による「在りし日を偲びて」という追悼書（上写真）を読んで、川越時代の磯子さんの「出会い」について記したいと思います。

追悼書

まず「はしがき」には、夫の佐藤権太郎氏から病死した妻磯子さんへの想いが、4人の子供たちに向けてこのように語られています。

「お母さんは、妻として母として、申し分のない方でした。お父さんにとっては良い妻であると共に、得難い相談相手でした。又子供等には賢いお母さんであり、優しいお母さんでした。此のお母さんを妻としたお父さんはこの上ない幸福でしたが、このお母さんを持った子供等もまた幸せでした…（略）」と。

約200頁以上にわたる追悼書には磯子さんの生涯に渡る詳細なことが語られていますが、特に20代の約3年間の生活をおくった川越時代に、彼女が生涯に関わるどんな人との出会いがあったのかを紹介したいと思います。

川越での出会い

佐藤権太郎氏は、妻にとっての大きな出会いを以下のように記しています。

磯子さんは1906年(明治39年)11月に川越に来て、最初は幼稚園内に住んでいましたが、その後小杉家に一時住んでいました。そして間もなくアプタン先生と同居されましたと…。川越での最初の1年の勤務は栴檀幼稚園でしたが、その後合併した初雁幼稚園に2年間勤務しました。その時にアプタン先生との出会いがあったのです。

園長のアプタン先生

初雁幼稚園時代のアプタン先生との親交は退職後も30余年も続き、最後まで親子のような関係であったと語られています。

アプタン先生の追悼文には「…彼女はいまここにはいません。でもまたいつかきっと彼女といつまでも一緒にいられる時が来ると私は思ってい

ます。彼女の愛らしい雰囲気や表現の豊かさは多くの友達を魅了しました…(略)」とあります。

小杉家（当時眼科医院）住田千鶴子さん（小杉家の娘さん・幼稚園の卒業生）の追悼文

「佐藤磯子様はその頃私の家の前の幼稚園に保母としての日を過ごされていました。そしてそこに近い関係上私の家で御起居なされていらっしゃいましたのです。佐藤様はその頃なかなかのハイカラだったので御座いましょう…略)」。

川越時代の磯子先生（1907 年頃）

佐藤権太郎氏二つの家を訪問

妻の磯子さんの生存中によく耳にした川越でお世話になったアプタン先生と小杉医院を、長女の久江さんと訪ねた佐藤氏は、「先日アプタン先生を毛呂に訪問の帰途、川越の小杉家をお伺いして、先生及奥様にお目にかかり親しく当時のことをお伺いして、なつかしく当時を偲ぶことが出来た」と記しています。長い間できなかった訪問がついに実現できたことは大きな喜びであったに違いありません。

同窓の島田栄子さん

島田さんは、仙台の女子神学校（青葉女学院の前身）を卒業して任地として定められたのが川越でした。毎日曜日、伊草（現川島町）という村落に日曜学校が開かれるので先輩の磯子さんと二人で一緒に教えに行ったりしたということです。川越からそこまで行くのに馬車を利用して通うおもしろい二人の様子が、当時の時代を表している楽しい想い出のエピソードとして書かれています。

最後の住居高円寺

磯子さんが結婚のため 1910 年（明治 43 年）に川越を去り、夫婦が最初の家庭生活を送ったのは牛込区でした。その後何度か引越しを重ね、最後の引越し先は 1924 年（大正 13 年）杉並区の高円寺で、磯子さんはそこで 11 年間余りの生活を送ったことになります。

私事ですが、数年前埼玉から高円寺に引っ越しをしました。現在佐藤家が住んでいた家の周辺は閑静な住宅街で、そこを訪れると何か今でも大正末から昭和の初期を見るような場所に思えるのは私だけかもしれません。

（川越基督教会信徒、歴史資料委員）

参考文献・教会資料

＊「在りし日を偲びて」佐藤権太郎　昭和 11 年

＊川越基督督会「資料委員会便り第 5 号」大内磯子姉　ドゥエル・ベーリ 2018 年

歴史資料委員会より

礼拝堂見学会

5 月連休の 3 日（金）～4 日（土）に礼拝堂見学会を設けました。普段の自由見学とは違い、午前 10 時～午後 3 時まで門扉周辺に案内板や受付を準備し、礼拝堂の中では説明員が 190 人ほどの訪問者を案内しました。礼拝堂の壁には教会・礼拝堂の歴史パネルを貼り、2021 年の礼拝堂聖別 100 年時に定礎から出された資料も改めて展示しました。また期間中、随時に教会のオルガニストが聖歌を弾き、訪問者も一緒に歌う機会をもちました。

たくさんの訪問者の方々が感想を残していただきましたのでその一部を紹介いたします。

「教会の歴史がよくわかりました」
「近くに住んでいても入ったことがなかったが、一度入ってみたかった」
「スタッフの方の説明がとても良かった」
「パイプオルガンの音色に癒された」
「讃美歌をパイプオルガンと共に歌う事が出来て感激」
「初雁幼稚園で三代お世話になり感謝」
「礼拝堂はすばらしい歴史的建造物。音響が素晴らしいですので周辺の音楽グループでもリサイタルなどの音楽イベントのために貸し出し制度を是非検討した方が良いと思う。」（都内に音楽を私立学校で教えている欧米人からの感想です。本人に聞いたら日本聖公会の聖オルバン教会（港区）では生徒のリサイタルのために借りることもあると伺いました。）

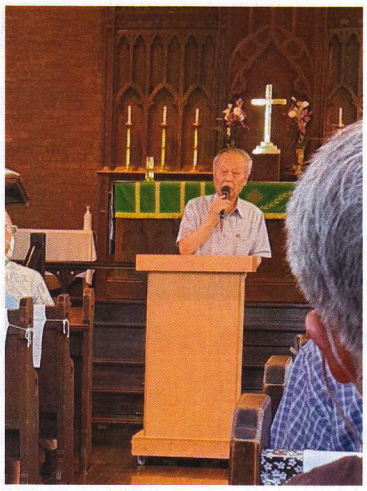
今年の川越まつりは10月19日（土）・20日（日）です。その週末でもう一度礼拝堂見学会を計画したいと思っています。

教会巡礼

6月1日（土）北関東教区•東京教区の14回目の宣教協働巡礼企画が川越キリスト教会にて行なわれました。川越キリスト教会では鈴木伸明司祭と信徒の方々15名がスタッフを含んで35名の巡礼者を迎えました。歴史資料委員会もお手伝いいたしました。

主な流れは以下の通りです。

＊午前10:30ホール集合・受付
＊歴史資料委員会の山本元さんによる川越キリスト教会の宣教が田井正一師によって始められた1878年から近年までの教会歴史説明（右写真）



＊ホールでカレーライス昼食会
＊川越市内散策：
・1901年田井司祭が設立した埼玉県内最初の幼稚園、現「幼保連携型認定こども園初雁幼稚園」（設立した場所は現在のと異なっています。）
・1889年に川越キリスト教会初めて建てられた礼拝堂跡地
・蔵造り商店街（蔵造りを屋内から見学するために特別にサツマイモ資料館を案内しました。）など
＊ホールでは礼拝堂100周年記念事業の一環として定礎開封の資料展示・説明
＊鈴木司祭司式による夕の礼拝

特別寄稿

「希望あふれる子どもの園」野澤達也著

初雁幼稚園120年のあゆみ

川越市立博物館元館長　大野政己

本書は市内にある初雁幼稚園の120 年の歩みをまとめたものです。初雁幼稚園は、私立の幼稚園として埼玉県内で最初に認可、設立された幼稚園です。初雁幼稚園に保管されている明治35 年（1902）3 月24 日の認可証には、当時の埼玉県知事木下周一の名で「本年二月十九日付申請私立幼稚園設立ノ件認可ス」とあります。申請者は田井正一で、明治22 年に成立した川越基督教会の牧師として着任していました。

『新編埼玉県史』によると、本県で就学前教育として幼稚園が実際に設けられたのは、明治17年11 月埼玉師範学校に附属幼稚園が設置されたのが最初です。その後明治20 年代になると、町村立尋常小学校に附属幼稚園が開設されるようになりました。その最初は明治20 年の熊谷尋常小学校属幼稚園で、同24 年までに浦和、所沢、本庄の各尋常小学校に幼稚園が開設されて計４園となりましたが、これらの公立幼稚園は財政上の都合などにより、同41 年度熊谷を最後にすべて廃止されてしまいました。

一方私立幼稚園は公立幼稚園よりやや遅れて、明治22 年に秩父郡大宮町（現秩父市）に誕生したのが最初のようですが詳細は不明で、しかもこの幼稚園はわずか4 年で廃止されました。そのような状況の中で初雁幼稚園は、明治34 年の「幼稚園盲唖学校及小学校ニ類スル各種学校ニ関スル規則」に基づいて明治35 年に正式に設置許可申請をなし、認可された最初の幼稚園です。

もっとも『埼玉県教育史』では認可した幼稚園の名称を宇気良幼稚園としています。宇気良幼稚園は初雁幼稚園の前身名称で、明治34 年に設立され、35 年の県への申請もこの名称でなされましたが、38 年に初雁幼稚園と改称されました。「宇気良」は「うけら」と読みます。「うけら」は植物の「朮（おけら）」の古名で、武蔵野は「おけら」の名所だったようで、万葉集などでも詠われています。

本書ではこの「宇気良幼稚園」は「宇気良幼稚館」だったとしています。それは最初期の入園願書に「宇気良幼稚館御中」とあることによります。「幼稚園」か「幼稚館」はおくとして、当時の川越基督教会が設立した幼稚園の名称に日本の和歌にも詠まれた「うけら」や「初雁」を採用したことに興味を引かれました。今では「初雁」は学校名などに使用されて一般的になっていますが、明治30 年代の川越ではどうだったのでしょうか。川越地方の歴史を踏まえた園名の採用に小さな感動を覚えました。

補足ですが『埼玉県教育史』によると、明治時代に埼玉県内で開設された私立幼稚園は以下の４園です。

・宇気良幼稚園（明治34 年）、設立者：田井正一（牧師）
・川越幼稚園（明治36 年）、設立者：榎本中三郎（元小学校教師）
・熊谷幼稚園（明治42 年）、設立者：桑田繁吉（牧師）
・幸手幼稚園（明治44 年）、設立者：青木翁助（元小学校教師）

これら４園のうち２園は当時の川越町にあったことになります。明治36 年設立の川越幼稚園は、現在でも学校法人えのもと学園川越幼稚園として存続しています。川越は幼児教育では進んだ町だったようです。

当時の私立幼稚園の維持経費のほとんどは、保育料に依存していたようですが、不足分は設立者の教会等からの繰り入れや、一般篤志家からの寄付などによっていました。初雁幼稚園の120 年は川越基督教会によるところが大きいのですが、川越地域の人たちの支援や理解により支えられてきた側面も大きいと思います。川越の歴史にとっても貴重な初雁幼稚園120 年の歩みは多くの人に知ってもらう必要があります…。

（川越民俗の会・会報第30号 2024.8.15）